



Title	子どもの貧困の経験 [全文の要約]
Author(s)	大澤, 真平
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	乙第7161号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87126
Type	doctoral thesis
File Information	OSAWA_Shinpei_summary.pdf



博士（教育学）学位論文（要約）

子どもの貧困の経験

大澤 真平

目次

はしがきー研究の理論的組み立ての見取り図ー.....	1
序章 子どもの貧困の経験という視点	
はじめに	3
1. 子どもの貧困の経験と家族.....	4
(1) 子どものそだつ環境としての家族	
(2) 家族の生活と子どもの経験	
2. 「貧困の経験」と「当事者の視点」ー貧困を子どもの側からみることー.....	8
(1) 子どもの貧困の経験と意識	
(2) 経験の主体としての子ども ーその到達点と課題ー	
3. 子どもの貧困の経験という視点 ー本研究の位置づけー.....	13
第1章 資源の欠如・不足としての貧困 ー本研究の分析視角と課題ー	
はじめに	19
1. 資源の欠如・不足としての貧困.....	19
(1) なぜ資源に着目するのか	
(2) 資源をどのように位置づけるか	
2. 資源とライフチャンス ー「貧困の世代的再生産」との関わりー.....	22
(1) 前提条件としての所得再分配と資源	
(2) 子どもの視点からの子どものライフチャンス	
3. 本研究の課題と方法.....	25
第2章 量的調査に見る子どもの生活	
ーケアの社会化と家族資源の観点からー	
1. はじめに ー本章の分析視角ー.....	30
2. 子どもの社会生活の現状.....	32
(1) 背景としての子育ての社会化	
(2) 子どもの放課後という新たな課題	
(3) 子どもの社会生活の分化の検討	
1) 放課後の居場所	
2) ケアを必要とする子ども ー小学生の放課後ー	
3) 学校で過ごす子ども ー中学生の放課後ー	
4) 子どもの社会生活の分化から示されること	
3. はく奪指標からみる子どもの生活.....	40
(1) はく奪指標	
(2) 子どもの生活を実現する資源	
(3) 子どもの生活と資源の検討	
1) はく奪指標の構成	
2) 資源とはく奪指標との関連	
4. 小括	47

第3章 子ども期の貧困の経験

はじめに.....	51
1. 調査の概要.....	51
(1) 対象者と調査方法	
(2) 調査対象者プロフィール (生育家族の基本属性)	
2. 生活状況の変動と落差.....	53
(1) 貧困のダイナミクス	
(2) 失われる家族の資源	
3. 子どもの家庭生活.....	55
(1) 家庭生活の基盤としての住居	
(2) 家庭生活と物的資源の欠如・不足	
4. 子どもの生活と社会参加.....	57
(1) 子どもの日常と余暇	
(2) 市場化された活動の機会	
(3) 公的な活動の機会としての学校生活	
5. 他者の関わりと生活.....	62
(1) 生活の質を高める他者のサポート	
(2) 他者のサポートの可能性に対する子どもの評価	
6. 生活の評価と受け入れ.....	66
(1) 子どもは生活をどう受け止めているか	
(2) スティグマと家族依存の意識	
7. 小括.....	68

第4章 子ども期から若者期の貧困の経験へ

はじめに.....	73
1. 調査対象者のプロフィール.....	73
2. 若者はどのような生活を望んでいたのか.....	74
(1) 選択を実現する資源との接続	
(2) 状況適応的な選択	
(3) 展望の潜在化	
3. 若者と家族.....	77
(1) 若者の生活の基盤としての住居	
(2) 残らざるを得ない者 ー 家族資源の不利と家族のケアー	
4. 若者と仕事.....	79
(1) 仕事につながる社会関係の実際	
(2) 公共の社会資源は若者を支えているか	
(3) 生活を実現する力を奪う健康状態	
5. 自身の生活の主体として.....	82
6. 小括.....	83

第5章 貧困の世代的再生産の実際—ジェンダーとライフコースの観点から—

はじめに	86
1. 本章の分析の意義とねらい.....	86
2. 「女性の貧困」とライフコース.....	87
(1) ジェンダーとライフコース	
(2) 貧困の女性化—ライフコース研究に示される貧困の要因と経験—	
(3) 女性のライフコースの「多様化」	
3. 貧困の中にある若年女性のライフコースと家族.....	90
(1) 「成人期への移行」過程の変容—家族に依存できない若者にとっての—	
(2) 重なる世代間のライフコース	
4. 貧困の世代的再生産の実際.....	92
(1) 親元から離れられない—状況の固定化と停滞するライフイベント『28歳未婚の場合』	
(2) 「父を見捨てて」—ケア役割からの脱出『32歳未婚の場合』	
(3) 女性役割のなかに生きること—流れに翻弄される人生『30歳既婚の場合』	
(4) 子育てにしばられて—稼働による力と自信の回復『32歳既婚の場合』	
(5) 貧困の世代的再生産の現れの形	
5. 小括	98

終章 貧困の世代的再生産の緩和・解消へのアプローチの方向性

—子どもの貧困の経験から考える—

はじめに	102
1. 子どもの視点から貧困を理解する.....	102
(1) 「いま」と「これから」をつなぐ「日常的な主体的行為」への着目の重要性	
(2) 子どもの視点からの貧困の中にある生活	
(3) 子ども自身の生活とライフチャンスとして	
(4) 分配と承認の不可分性	
2. 子どもの視点の貧困の理解から支援と政策のあり方を考える 106	
(1) 子どもの生活を実現する社会的な条件整備の必要	
(2) 資源の不足・欠如としての貧困	
(3) 家族依存と家族政策	
3. おわりに	110
初出一覧	116
謝辞	117

学位論文内容の要約

本研究の目的は、子どもの貧困の経験（children's experience of poverty）とその帰結を示すことにある。子どもの貧困（experience of Child Poverty）という特別な貧困があるのではなく、構造的に私たちの社会に存在する貧困という問題に対して、子どもや若者の視点から理解を図ることが中心的な課題となる。これは、貧困問題の理解を深めるひとつの試みである。より具体的な研究課題として、第一の課題は、子どもの視点からみた貧困の生活と認識を明らかにすることである。第二の課題は、子ども期と若者期の「いま」の積み重ねとライフチャンスの実現の実際を示すことである。貧困にある子どもの生活を検討することで、子どもにとっての貧困の経験を明らかにし、その子ども期の経験と若者期の経験の連続性を検討することで、子どもにとっての貧困の経験が貧困の世代的再生産につながることを示していく。本研究のひとつの大きな特徴は、8年間にわたる継続調査を実施していることである。そのことで、子ども期からの不利の継続と、貧困の世代的再生産を動態のなかで捉えることができる。

一般的に「経験」とは人が主観的な体験や感覚や内省をつうじて得るもの、あるいはその獲得過程を意味する。経験は必ずしも現実のなかでの実体験を必要とせず成立しうる概念である。しかし、本研究で主題とするのは「貧困の経験」である。子どもの貧困の経験という視点は、特に経済的困窮の中での物的基盤に基づく子どもの生活に対する認識と主体性を捉える視点として定義したい。分節化して述べると、子どもは貧困にある生活の現実をどのように感じ、受け取り、理解し、意味付けているのか、そのことと相互作用的に、自己認識や社会関係をどのように持ち、主体的な行為や選択として貧困にある生活に対処していくのか、そのことを「貧困の経験」として捉えていく。

この際、大事な点は「構造の中での行為における主体性」という観点を外さないことである。これまでの日本の貧困にある子ども・若者を扱った質的研究は、いずれも認識と行動（主体性）の側にフォーカスが当たり、貧困にある生活そのものをきちんと分析して示すことはなされてこなかった。貧困の経験を明らかにするということは、あくまでも貧困にある生活、つまり物的基盤のあり方を前提に認識と主体性を捉えていくということである。その点で、先行研究として詳細な分析を行った T・リッジらの研究は物的基盤と認識や行動の関係をきちんと捉えている。本研究もリッジらの研究の延長線上にあると言える。

このように本研究は「構造の中での行為における主体性」という、両者の関係を明らかにすることがひとつの大きな枠組みとなっている。そのための分析視角として、「資源の欠如・不足としての貧困」と「子どもの貧困の経験」を提示している。背景には、構造と主体性の両面を理解できなければ、貧困にある子どものライフチャンスの不平等を捉えられないという問題意識がある。博士論文全体では、この構造と主体性の両面のつながりを描く事に注力している。

序章では「子どもの貧困の経験」に関する議論を整理している。子どもの貧困に関する研究は、主に量的調査の分野で全体像の把握がなされてきた。その知見に基づいて、具体的な生活の様子、家族間の関係性や相互作用、あるいは社会的排除に置かれた状況など貧困のなかに暮らすこと、そして子どもの社会生活へのインパクトなど、当事者がそのことをどのように

うに受け止めているかを明らかにするため、「子どもの声を聴く研究」がなされてきた。しかし、それらの研究では貧困の影響を「短期的な観点（子ども期それ自体）」と「長期的な観点（大人になってから結果）」の両方から理解する必要があると指摘しつつも、実際には子ども期あるいは子どもの「いま」への影響を明らかにするに留まっていた。そこで本研究では、貧困の中で子ども期を過ごした若者12名を対象に、8年間にわたる継続インタビュー調査を実施し、子ども期からの不利の継続と、貧困の世代的再生産を動態のなかで捉えることで、「子どもの貧困の経験」の意味を問い直し、貧困の世代的再生産の緩和・解消のための生活の保障とアプローチの方向性について検討を行った。

第1章では「資源の欠如・不足としての貧困」として、必要を充足する資源の欠如・不足や生活実践のための資源の調達と組み合わせといった「資源」の観点から、子どもの貧困の経験を明らかにするために必要な概念の検討と整理を行った。ここでは、個人的資源や対処資源や社会関係的資源といった生活を組み立てるために用いる資源にも注目しつつ、物的・経済的資源や公共の社会的資源の欠如・不足と子どもの生活のあり方について考察する枠組みを示した。それは物的基盤に基づく子どもの生活、それに対する子どもの認識、そのなかでの子どもの主体的な生活実践に与える影響を捉える視点となる。

第2章では、子どもの生活と家族の持つ資源の関係を明らかにするため、量的調査である北海道における子どもの生活実態調査のデータを用いて、子どもの生活と家族の持つ資源との関係について検討を行った。特徴として保護者票と子ども票が同一世帯でマッチングできるよう設計されており、家計や家庭状況についての保護者の回答と、子どもの生活に関する子どもの回答を組み合わせることが可能となっている。ここでは小学5年生の保護者票（配布件数2725件、有効回答票率75.1%）と子ども票（配布件数2725件、有効回答票率75.0%）、マッチング率99.3%を用いている。国民生活基礎調査から相対的貧困線（可処分所得の中央値の50%）を算出、その貧困線からの比で所得階層を区分している。所得階層別の分析からは、放課後児童クラブ事業、公園や児童館など既存の公共サービスや社会資源の重要性が改めて示された。また、部活動など市場での選択から一定離れたところで用意されている制度化された仕組みが、実際には家族資源の問題で利用できないといったより深刻な問題も確認された。はく奪指標を用いた分析からは、経済、時間、社会関係、移手段、情報といった資源および家族の状態と、子どもの生活水準との関連性が示された。貧困・低所得に置かれた世帯では所得の不足を他の資源で補うことで子どもの生活水準を維持する必要があるが、他の資源によって所得の不足を十分に補うことは難しく、他の資源ですら欠如している場合には、子どもの生活水準を維持することは相当困難になることが示された。

第3章では子どもがどのように自分の生活を形づくろうとしているかを示し、貧困にある生活の経験を当事者の視点から描き出すことを試みた。調査対象としたのは生活保護世帯、児童扶養手当受給世帯、そのほか経済的に困窮した状態にある世帯で子ども期を過ごした、当時高校卒業後間もない20代前半の若者、男性6名、女性6名の合計12名である。子ども期だけでなく若者期も含めた貧困の世代的再生産とライフチャンスのあり方を視野に入れるため、数年間の追跡調査を行うことを前提にこの年齢層を調査対象とした。中卒や高校中退者の事態はより深刻であるが、調査時点ですでに専門学校を含む高等教育進学率が75%を超えている社会的状況にあることを考え、相対的貧困という観点を意識してあえて高校卒業資格を持つ者を対象として選定した。明らかになったことは、家族の状況が子どもの生活実

現にダイレクトに影響を持つ様子であった。家族が疾病や失業、離婚などで経済的に困窮するだけでなく、人手、時間、移動手段といった生活を構成するための資源を割くことができなくなると、子どもの生活実現の可能性が狭められることになっていた。また、家族とは別に子ども自身がアクセスできるサービス、物的資源、社会関係的資源についても、現実として子どもの生活実現を支えることは十分にはできていなかった。いずれにしろ子どもは資源の欠如・不足のなかで貧困のスティグマを感じており、加えて、生活実現の家族依存を当然視する規範意識のなかで、主体的に資源にアクセスして生活を組み立てていこうとするエージェンシーが押しとどめられていた。

4章では高卒前後から20代前半の子ども期と若者期の接点ともいえる時期の生活実現について検討した。ここではインタビューを行った12名の若者期として、高校卒業時から20代前半までの生活について、引き続き資源の欠如・不足としての貧困の観点から、その生活の実現の様子を検討した。その際、どのような資源を利用して生活を組み立てていくかについて、その前提となる自分の置かれている状況や資源がどの程度実用的なものかといった「評価」の認識や、どのような生活を望むかという「選択」の認識の両側面に特に注目した。そのことで、子ども期の生活と若者期の生活の連続性を検討している。明らかになったことは、子ども期から若者期までの、それぞれの「いま」の生活を実現していく様々な資源の後押しの無さや資源の実用化の困難という状況、そのことによって自分の生活を実現していく資源への評価や選択可能性に対する認識の幅が狭められてきたことであった。そのことが、その後の若者期の生活の不安定化にもつながっていた。ライフチャンスは子ども期の経験や機会のあり方が子どもの将来展望の基礎になるとすれば、それは十分に保障されたものではなかった。

5章では8年間の継続調査をライフコースとジェンダーの観点から分析し、貧困の世代的再生産の実際を示した。12名の調査対象者とは継続的に連絡を取り近況の確認を行ってきたが、結果的に女性のみへのインタビュー調査という形になった。しかし、インタビューを実施した女性のライフコースをみていくと、ジェンダーに関わる問題の大きさが図らずも見えてくることになった。子ども期からのライフコース全体を通じてみると、生活保護、児童扶養手当、各種支援事業、障害者年金、公営住宅など公共の社会的資源が生活の支えとなっていることが改めて理解できる。しかし、公共の社会的資源は最低限度の、あるいはそれを下回る水準の生活しか支えられていなかった。また、子ども期の段階から、その親やきょうだいを含めた家族への社会的支援（ケアの社会化）が必要であること、そして、若者期に対する就労支援や自立支援のなかで若者たちが抱えるケアを必要とする人々に対する対応を含めていくことの必要性が示された。そのライフコース選択は子ども期から貧困にある家庭の生活の延長線上に描かれ、結果として本研究で貧困の中に置かれた子どもたちに貧困から脱するライフチャンスは無かった。

本研究で明らかになったことは、貧困は子ども期を損なうものであり、将来的な機会だけではなく、適切な子ども期を得られなければ子ども自身のライフチャンスの実現にはつながらないということであった。子どもの日常を描く中で見えてきたことは、日常的な主体的行為の積み重ねが貧困の経験を形づくり、それがライフチャンスに関係しているということであった。子どもの視点からすれば、進学する努力や就活といった戦略的な主体的行為の結果ではなく、日常の主体的行為の結果である日々の経験こそが選択に対する意識を形づくって

いた。子ども期の日常的な主体的行為の積み重ねの先に、戦略的な主体的行為としてのエージェンシーを発揮できる状態をいかに実現するかが問われていると言えるだろう。

そのためには必要をいかに充足するかという従来のアプローチではなく、それぞれが実現したい生活の必要を満たす資源の充足をいかに図るかという対応が求められている。本研究で示されたのは、子どもの社会に全面的に参加するために必要となる資源が不足・欠如しており、現実の選択肢が限られているということであった。とはいえ、それは生活のすべてが実現できないということではなく、資源をやりくりしながら、ある必要は満たせるが、代わりに別の必要は満たせないという状態であり、その生活の実現は個別に異なっていた。そういう点で、子どもの基本的なニーズを選択しなくてはならない状況を、まずは問題視する必要があるだろう。

また、貧困がパワーレス・ボイスレスといった状態や、社会関係からの排除、他者の集合的なエージェンシーによる制約といった、生活実現の力を縮小させるような関係的/象徴的側面への影響をもたらし、当事者のエージェンシーを縮小させることも明らかになった。分配と承認は不可分であり、同じ社会構成員としての対等な存在の承認をどう実現していくか、資源の分配による参加の同等性の確保の重要性も示された。貧困にある子どもや家族の生活実現への支援と政策は、これらのことを理解したうえで対応していくことが求められている。

以上のように、本研究は子どもの貧困の経験とその帰結を明らかにした。特に当事者の認識や主体性を、あくまで構造としての貧困のなかで捉えるために、「資源の欠如・不足としての貧困」という視点から「貧困の経験」を分析した点に独自性がある。また、従来の「子どもの声を聴く研究」は子ども期の影響しか実際には捉えられていなかったが、本研究は8年間に及ぶ縦断調査を実施し、動態の中で貧困の与える影響を明らかにしたことで、「子どもの声を聞く研究」の時間軸を拡張することに貢献した。そのことで世代間の不利と困難の移転という貧困の世代的再生産研究のこれまでの知見に、子どもの側から貧困の中に生活することの意味と影響を位置付けることができた。